安兵衛』では、大人になった安兵衛は長屋で飲んだくれ、退廃的な生活を送る【図03】。『まんが清水次郎長』に至っては、少年は長じてヤクザになる。

石田英助の『大久保チョコ左衛門』『一休和尚さん』は、幼少期から一足とびに老年時代が描かれる。そのあいだの過程は描かれない。『一休和尚さん』における幼少期は、老人になった一休宗純の思い出話という体裁で描かれる【図04】。幼少期を懐古する構成は、大城のぼる『土丹馬太衛門』でも採用されている。土丹馬太衛門が殿の子守をすることになり、彼らに自らの幼少期の話をするのだ。

講談本を漫画化することにもっとも意識的だったのは、謝花凡太郎だろう。もともと多作な作家ではあるが、わずか二年間で十冊の本を描き下ろせたのは、原作となる物語の存在も大きい。次章では「伝記」という形式に謝花が込めた内容について論じたい。

3・謝花凡太郎その2 心身の不意一致と視線の対位法

中村書店の講談本コミカライズは、ジャンルにおける最も高水準の作品が現れるところから始まる。それは一九三五年十二月に刊行された謝花凡太郎『まんが忠臣蔵』である。

『とんまひん助』において謝花は枠物語、メタ構造、作中劇などを駆使した複雑なナラティヴの統合を試みたが、本作では単線的に時間が進行してゆく物語にどれだけの深みを獲得できるかに挑戦している。その深みは、登場人物の「心身の不一致」によって導かれる。これは読者から見えている＝紙に印刷されている「言葉」と、登場人物の「身振り」と、漫画を読む過程で読者が想像する人物の「心情」の三要素が互いに矛盾することで生成される複雑な感慨に他ならない。

『とんまひん助』のラスト・シーンで「目から汗がでる」と言いながら嬉し泣きをするひん助に、すでにその萌芽がある。もちろんこの嬉し泣きは、単純に嬉しくて泣いているのではなく、これまでの忍苦があってこそ輝くもの。

『まんが忠臣蔵』の主人公である大石内蔵助の忍苦は壮絶である。浅野内匠頭の殿中刃傷事件のあと、赤穂浪士はそれぞれ間諜を欺く生活を送る。仇討ちの野望を幕府に悟られないため、大石内蔵助は小僧に、無理に罵らせ、殴らせる【図05】。大石もアルコール中毒の退廃的な浪人の真似をして、間諜のみならず、同じ侍にも呆れさせるような振る舞いをする。仕舞いにはその自堕落な様子を薩摩藩士に咎められ溝川に突き落とされる。それでも大石は耐え忍ぶ。主君の仇を討つという目的のために恥も外聞も捨て去るのだ。

【図03】新関青花『まんが堀部安兵衛』貧乏長屋で酔い潰れる安兵衛。

これは他の赤穂浪士たちにも当てはまる。彼らはみな心と行動が引き裂かれており、当時の児童漫画としては異質の暗さがある。であるから討ち入りの前日、大石の元へ赤穂浪士たちが駆けつける場面は、心と行動が合致する幸福な瞬間として描かれ、高揚感がある。

「犬猿の仲」からの連想だろう。登場人物が犬と猿に擬人化されているものの、吉良上野介や浅野内匠頭といった実名が使われる。これまでは「孫悟空」が「ン五九」にされるような、児童漫画的な名称の変換があったことと比較してリアリズムへの傾倒を、そこに読み取ることもできる。それは同時に絵や構図の質の後退を招いた。以前の作品にみられた荒唐無稽の味はなくなり、構図も人物を真横から捉えたようなものが大部分を占めるようになる。それとトレード・オフの関係として、文字が増える。おとなしい構図と、大量の文字。これが、より複雑な物語の進行を可能にした。

先ほど引用したひん助のセリフ「苦勞を澤山してやつと評判になつた」から明らかなように、謝花凡太郎には苦労や忍苦を尊び、立身出世を称揚する感覚がある。要するに「艱難辛苦汝を玉にす」（苦労をたくさん乗り越えてこそ立派な人間になる）ということだ。一方、謝花には旧弊を退けてモダンな装備や技術を称揚する感覚がある。これは初期の『魔法の昭ちゃん』『ミッキーの活躍』に見られるが「講談本コミカライズ」期になると鳴りを潜める。

この時期のもう一つの傑作『まんが大西郷』も「艱難辛苦汝を玉にす」といった作品である。またここでは「成長」の他に、デビュー作からしばしば描いてきた二人連れの主人公（ブロマンス）の主題も復活している。

【図04】石田英助『大久保チョコ左衛門』前半の幼少期は、左ページの老人・チョコ左衛門の回想という体裁になっている。

西郷は足軽の子と蔑まれながらも、熱心に勉強して剣術の腕を磨く。西郷にはブウ太というド近眼の友人がいる。西郷は江戸へ出て、ブウ太は薩摩に留まる。桜田門外の変のあと、二人は合流して蛤御門の変、鳥羽・伏見の戦いと幕末の動乱の渦中に身を投げる。ブウ太は途中負傷するが鼓笛隊長に任命される。

ブウ太は絶えず西郷を立てるが、そこには自分の障害（ひどい近眼）に対する投げやりな諦めがある。西郷は足軽の子と馬鹿にされても、竹刀を持った同級生にリンチされるまで耐え続ける。ここには薩摩の強い身分制度への諦めがある。であるから二人は硬い絆に結ばれており、その別れも一層感傷的なものになる。

江戸に出奔することで薩摩という枷から自由になる西郷と、近眼に縛れるブウ太の違いが身につつまされる。夜中の二人の別れは感動的だ【図06b】。見開きの右ページに俯き項垂れて「オイドンは近眼だからオハンの聲は聞こえるがもう姿は見えない……」と嘆くブウ太と、頼山陽の文句を口ずさみ歩いてゆく西郷の対比は胸を打つ。

この見開きの直前のページも素晴らしい【図06a】。丸太に座ったブウ太が、焼き芋を食いながら西郷に「別れたくない」と言う。西郷は、ブウ太との別れに胸を痛めつつも、上京する喜びに胸が高なっている。二人は別れの辛さを噛み締めながら焼き芋を食べるが、その境遇がズレつつあることも互いにわかっている。その心理が、二人の交わるようで交わらない、視線の方向で表現されている。特に左ページ一コマ目がいい。

【図05】謝花凡太郎『まんが忠臣蔵』

二人は会話をしながらも目線をあわせず、下を向いて芋を食う。西郷はぼんやりと正面下を眺めるが、ブウ太は芋も涙も噛みしめるように斜め下を向く。一つの画面に、微妙に異なる心理が目線の方向で表現されている。元々同じ立場であった二人の身分が、徐々に差が開いてゆく様子は『まんが太閤記』でも描かれが、より洗練されている。

視線を用いた心理劇は『まんが大西郷』のクライマックス、勝海舟と西郷隆盛の会談のあとのページで頂点を迎える【図07】。江戸城開城の約束を西郷と交わして帰路につく勝の堂々とした様子。それをじっと無言で見つめる西郷の覚悟を決めたような瞳。勝を刺そうと血気盛んな侍たち。それを制止するブウ太。彼らはみな違うことを考えている。各自の思惑はすれ違い、交差しており、四つの視線の対位法とでも呼べるような、堂々たるラストシーンが展開されている。

【図06_a】謝花凡太郎『まんが大西郷』

結論を書くならば、謝花凡太郎は『とんまひん助』や『まんが忠臣蔵』以降の「講談本コミカライズ」を描く過程で、複雑な内面を持つキャラクターを生み出すことになった。それは、ひん助や、大石内蔵助や、西郷、ブウ太といった、児童漫画の主人公らしからぬ苦労をする主人公である。彼らはみな痩我慢をしている。心と身体にズレが生じている。そこにおぼろげながらキャラクターの「内面」のようなものが表れている。それぞれが内面を持つことで、互いの気持ちをわかりあっているという前提が崩れた以上、孤独な心のうちを持つ視線は、互いに混じり合わず、曖昧に交差せざるをえない。その最良の例が『まんが大西郷』のエピローグ【図07】の視線の対位法に表れているのである。

【図06_b】謝花凡太郎『まんが大西郷』